
確かめたいこと

raira

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

確かめたいこと

【Nコード】

N7414P

【作者名】

raira

【あらすじ】

僕の彼女は、一言でいうならばアツサリしている。

執着がないというか何というか…。

だから僕は彼女の気持ちを確かめられずにはられない。

第一話（前書き）

残酷なシーンのライン引きが不明ですが、おそらく出るだろう。と
いうので入れています。

一辺倒な愛情表現をする主人公です。

第一話

ああ、一目、彼女に会いたかった…。

冬の寒さが刈り込まれた頂を攫う頃、彼女へ贈り物を買いに少し遠出をしていた。

彼女に『何か欲しいものは？』と聞いても、『特に。』と淡白な答えをする人であるため、毎度この季節は頭を悩ませる。

世間では恋人達が色めき立つクリスマスだというのに、僕たちはアツサリしたものだ。

いや、正確には僕たちではなく、”彼女が”アツサリしているのだけ…。

僕は、できれば一般的な恋人たちのように舶来ものの行事であろうとなんだらうとクリスマスを楽しみたい。

健全今時男子であれば、誰しもが思うだろう。

まあ、とにかく。僕の彼女は、実際僕のことを好きでいるのか怪しいのだ。

疑うわけではないが、いや、正直疑っているのだけど。

今、相手がいないからお付き合ってもらってるんじゃないかと、どうしても思ってしまう。

これは、決して僕が心配性だからだとか、嫉妬深いからだとかいうわけじゃない。

例えばだ。

僕が友達と飲みに行くとする。そこには、男だけじゃなくて、女の子もいるとする。

大体、彼女だったら、そこに女の子はいるのかとか聞くもんじゃないんだらうか。

残念なことに僕の彼女は、そんなこと一回も聞いてくれたためしがないんだけどね。

剩え、『別にそんなこと、いちいち言わなくていいのに。』とまで仰る。

どうしてそんな酷い…失礼。

結局、僕は聞かれもしないのに『フリーの女の子も参加する』だとか『友達にどうしても言われて、断れないから参加する。』等と喋り、彼女の無言の冷たい視線を浴びることとなる。

『だから、なに？』と彼女の眼は言っているのだと思うけど、僕はまだ視線の意味を怖くて聞けないでいる。

そして、僕は飲み会には参加しない。

結局行かないのであれば、わざわざ彼女に言わなくてもいいんじゃないかと思うだろう。

だがしかし！彼女の気持ちが少しでも知りたい僕は、愚かにも端から行く予定のない飲み会の話をするのだ。

それで彼女の気持ちがわかったかのなんて？そんなの、愚問だよ。他にもある。

僕が彼女以外の女の子と談笑していたとして、しかもどうやら親密そうだ。なんて状況で、それを目撃したら普通は、怒るとはいかずとも険悪な雰囲気には少しはなると思う。

でも、彼女はそんなそぶりを露ほどもみせない。

仕返しに、僕以外の男と仲良くするとかがあれば嫉妬してくれてるのかと思うところだけど、そんなことを彼女がしたのを僕は一度も見えない。

まだあるが、これ以上言ってしまうと自分が惨めになってしまうので、やめておく。

聞きたいなんて言わないでくれ。僕を哀れに思うなら。

第一話（後書き）

生暖かい目で見守れる話にしたいです。

第二話

珍しい。

今日は、奴からメールも電話もない。

いつもなら朝の『おはようメール』に始まり、聞いてもないのに

『僕の今日の予定メール』『ランチの約束』『今日の講義の感想』

『午後の予定の確認』等々。

ストーリーじゃないかって？

これだけ聞くと完璧なストーリーカーに思えなくもないが、これは私の
彼氏の話だ。

私の彼氏こと戸塚慶吾は、マメな奴である。

付き合ってからずっとなので慣れてしまったが、友人からは随分と
愛されていると言われる。ただ、偏っていると注釈がつくのだが、
慶吾とは大学が違ったため毎日顔をあわせるということはないが、そ
の代りなのだろうかメールと電話が絶えない。

少なくとも生存確認にはなっていると前向きに考えることにしてい
る。

ただ、携帯料金は大丈夫なのだろうかと毎月心配になるが…。

以前聞いてみると、『バイトで稼いでるから。』と微妙な答えをも
らった。

それは答えになってないと思うのだが、なんだかそれ以上聞けなか
った。

それ以来、連絡の多さとかについては触れられていない。

あれだけマメな慶吾がメールの一つも寄越さないなんて、なにかあ
ったんじゃないかと心配になる。

普段ならありえない状態に、無性に胸がざわつく。

友人や親からはクールだの落ち着きすぎてるだの言われるが、私だって感情がないわけじゃない。

ただ、表面に出にくいというだけのこと。

今だって、心配でそわそわしているのに。

この講義が終わったら電話しよう。そう決めて、意識を大分進んでしまった教授の話へと戻す。

これは後で誰かにノートを借りなきゃいけないな、と真っ白な自分のノートを見て思わず溜息をついた。

第二話（後書き）

彼の名前が判明。

しかし、彼女は不明なまま…。

追々出します。

第三話

無機質な呼び出し音が鳴り響く。

おかしい。

なんで今日に限って出ないのだろう。

充電切れ？いや、それなら呼び出し音は鳴らないはず。
じゃあ、どうして…。

「紗依。眉間の皺がマリアナ海溝のごとく深いよ。」

暫く独り思案の渦に沈んでいたらしい。

顔を上げれば、何故だか偉そうに腰に手を当てて仁王立ちしている友人の姿があつた。

「そんなに険しくないと思う。」

ぼそりと反抗する。

「ワンちゃんが心配？」

「…。」

「いつもは煩そうにしてるくせに、いざ引かれると寂しいんだねえ。」

「うるさいよ。」

あら恐い。なんてふざける彼女を後目に席を立つ。

今日の講義は終わったから直接会いに行けばいいのだろうか。いや、それは突然すぎる。

確かに言われたとおり今までは追われる立場だったから、逆にいざ追う立場に立たされると行動に困ってしまう。

「はあ。」

こういうことで悩んだ経験の乏しい自分を恨んだ。どうしたらいい

のか分からない。しかし、なんだかんだ言っても私も女子であり、彼氏に何かあったんじゃないかと心配だっけするし、遊びに行きたい気持ちもあるし、恋人達のイベントにだってテンションは上がったります。

そして残念なことに今日はクリスマスであつたりする。

肝心な時に捕まらないなんて！

不安な気持ちは、段々とイラつきに変わる。

「あんにやろう！」

突然大声を出した私に視線が集まり、顔面に血が昇る。

「…っ。」

不意打ちの羞恥心に居た堪れなくなり、その場を早足で立ち去った。

どこへ行くとも考えずに歩く私のポケットから振動が伝わる。

慶吾かと思いきやあまり携帯を落とすそうになりながらディスプレイを覗けば、さっき私をからかっていた友人の香菜だった。ガツカリしながらも電話に出る。

「どうしたの？」

「やだ、機嫌悪いね。」

含むような笑いをする香菜に些かムツとする。

「誰のせいだと…。」

「まあ、そんなこと言わずに。それより、ワンちゃんには連絡ついたの？」

機嫌の悪い私など気にも留めず香菜は話を進めた。

「…まだ。とういうか、さっき電話かけたつきりだもん。」

「そう。で、あんたはプレゼント買ったの？」

痛いところを突かれた。

「それも、まだ。」

「あんたねえ。」

呆れる香菜の顔が浮かぶ。

「クリスマス当日までプレゼントの一つも買っていない彼女なんて、

いつ愛想つかされてもおかしくないんだからね。」

「またしても痛いところを突く。」

「…わかってる。」

「本当に？」

「わかってるくせに。香菜はこういうところが少しイジワルだと思う。」

「わかってる。今から買いに行くから。」

「慶吾の欲しいものなんてサッパリだけど。という言葉は飲み込んだ。だって、言ったら彼女のくせに何やってんの？なんて言われかねない。」

「今からじゃ普通、遅いんだけどね。ちゃんと考えるのよ。」

「母親みたい。なんて香菜に言ったら呆れられるだろうか。」

「私なんかより格段に大人であろう香菜には、いつも助けられている。欠点だらけの私と友達でいるのは、さぞや面倒だろうに。」

「大丈夫、ちゃんと考えるよ。ありがと。」

「珍しく素直だね。後で結果聞かせなさいね。」

「なんだかんだで香菜は優しい。やっぱり母親だ。」

「うん。じゃ。」

「切れた電話を見ながら暫し考える。
さて、何を買ったらいいのやら…。」

第三話（後書き）

彼女の名前が判明。しかし、下だけ。
友達でしたー。そして、下だけ。

第四話

人身事故でもあったのだろうか。

この混み具合は半端じゃない。

目的の駅につくなり人の多さに帰りたくなったのは気のせいではない。

クリスマスといえども、これは酷いだろう。

こんなんですべてどうすればいいのかと途方に暮れていると、声をかけられた。

「すみません。」

さすがの人混み。邪魔になってしまったのだろうか、こちらでも謝る。

「すみません。」

しかし、なかなか目的の店までには距離がある。

「すみません。」

また邪魔なのだろうか。混んでいるのだから状況をみてくれと思い、声の方を向いた。

「すみません、今からどこに行くんですか？」

「はい？」

私の疑問の声など気にもせずに見覚えのない男性は会話を続ける。

「これから少しお時間ありますか？」

見知らぬ男性の言っている意味を汲み取るのに時間がかかった。これは世にいうナンパ…。

「よかつたら、携帯教えてもらえませんか？」

「無理！」

電光石火の速さで断りを入れ、段々と理由もわからずイラついてくるのを感じていた。

見知らぬ人には申し訳ないが、今の私に携帯の話はタブーである。そこをなんとかと言う男性を無視し、足早に目的地へと向かう。

こんな時にナンパされるのも、こんなにイラつくのも全部慶吾のせいだと半ば八つ当たりをしつつ慶吾へのプレゼントを考えるなどと器用なことをしながら歩く。

そして頭の中はぐちゃぐちゃで、結局買うものなんて思いつかなかった。

そういえば、慶吾の欲しいものの話なんてしたことなかったな。なんて今更手遅れなことを思い出しながら歩いていれば、いつの間にか目的地にたどり着いていた。

「さて、と。メンズ向けの商品は…。」
と独り言つ。

とりあえず彼の好きなものがプレゼントの定番だろうと思いつく。が、その肝心な”好きなもの”が今一わかっていないことに今更ながら気付く。

今まで私は何をしてきたのだろうか。
与えられるばかりで相手をきちんと見ていなかったんじゃないだろうか。

それって、お付き合いしてるっていえるの？

まさか慶吾はそのことに気付いていて香菜の言つとおり愛想をつかしてしまっただんじゃないだろうか。

考えれば考えるほど鬱になっていく。

私って、こんなに後ろ向きだったかな。

段々と思いのループに囚われていく私は、大切なことに気付けずいた。

第四話（後書き）

早くプレゼント買っちゃいなよ！インスピレーションで
と言いたくなります。

第五話

結局買えなかった。

自分の不甲斐無さに泣きたくなる。

一か月ならまだしも一年以上付き合っているというのに。

これは正直に謝って欲しいものを慶吾に聞くしかないだろう。当たって砕けるだ、なんて自虐的なことを考えながら家路を急ぐ。

帰りの電車で慶吾へ送っていたメールに、まだ返事はない。

あれは、いつの事だっただろうか。

慶吾が友達と飲みに行くんだと報告めいた話をしたことがあった。なんでわざわざ言うのだろうと訝しんだのを覚えている。

ああ、そうだ。合コンに行くのだと言っていたんだっけ。

合コンに行くなんて、きつと私と別れたいんだろうと別れの覚悟をしたが慶吾は結局行かなかったな。何がしかったのか未だ理解できない。

慶吾は時々、理解に苦しむ行動をすることがある。

きつと今日もそれなのだろう。

もやもやとしたものに無理やり理由をこじつけても、ちくりと感じたのは、きつと気のせいではない。

いつからこんなに不安を感じるようになってしまったのだろう。

出逢ってからなのか、同じ時間を過ごしていくうちになのか。

もともと一人でいることが多く、また一人で過ごすことに慣れていた私にとって誰かと同じ時間を過ごすのは異様でむず痒いものだった。

た。

香菜の言つとおり押されていくうちに、自分だけじゃない時間に慣れていく私があった。だけど同時に、一緒にいる人のいない時の寂しさを感じるようになっていった。

それは悲しいことではなく、寧ろ喜ぶべき感情かもしれない。

だからこそ不安でいっぱい自分が抑えきれなくなってしまう時がある。ただ、そんな自分を慶吾に知られるのがこわくてこわくて全然可愛くない態度をとってしまった。

思い出すほどに後悔ばかりで気持ちは余計に落ち込む。

本当は他の女の子の話なんか聞きたくない。

本当は合コンになんか行ってほしくない。

本当は毎日あいたい。

本当は…。

どんどん貪欲になっていく自分に恐怖すら感じる。

こんな醜い自分なんて知りたくなかった。

無欲の愛なんてあるのだろうか。もしあるのならば、それはなんて難しいことなんだろう。

こんな少しの隙間であっさりと落ちていく自分に落胆する。

すっかりしなくちゃいけない。

こんなどろどろとした感情を知られたくない。

溢れ出す欲心を力任せに抑え込む。

知られないように、感じられないように。

第五話（後書き）

どうも暗い展開に…。
わー。

第六話

そこは、宝箱だった。

僕がその店に出逢ったのは、廻りあわせともいふべき偶然からだつた。

まあ、ざっくりいえば道に迷つてたまたま見付けただけなんけども。

外観は若干大きめの住宅街に隠れるように建てられた古びた洋風の建物で、店の内装は外観からの期待を外さない造りになっている。

アンティークの家具や食器、ガラス製品などが並び、壁にはエキゾチックなタピストリーが掛けられている。天井からはクリスタルだろうか、日本には不釣り合いなシャンデリアが吊り下げられている。なんとも豪華な光景に思えるかもしれないが、実際に現場に立てばそのようなことは些かもなく、室内の緩やかな灯りは窓から差し込む太陽と相俟つて、なんとも居心地のよい空間をつくり出している。現代のコンクリートに溢れた生活とは懸け離れた空間に不思議と安心感を覚え、僕は一瞬でこの店に続けて通うことを決めた。

どうやら店内にあるものは全て売り物らしい。天井のシャンデリアから手書きの値札が見え、僕は思わず笑いを零す。

「何かお探ですか。」

意識を飛ばしていた僕は、突然の人の気配に仰け反った。

「…どうも。」

「いや、驚かしてしまつたようですね。申し訳ない。久しぶりのお客様だったものですから。」

そう言つて軽く笑つた彼は、店の雰囲気そのままの上品な紳士だつ

た。きっと、彼が店主なのだろう。

「いいお店ですね。毎日お邪魔したいくらいです。」

「そう仰っていたけると、今日は開けていてよかった。」

「今日は」ということは、あまりやっていない店なのだろうか。

「定休日か何かだったんですか？」

「いえ、定休日というのはないんですが、この店は毎日開けているわけではないので……。」

そう言葉を濁した彼は、不思議な笑みを浮かべる。

「じゃあ、僕はラッキーですね。実は道に迷って偶然この店を見つけたんです。近道しようと思って直感で歩いたらここまで来ていました。」

「それはまた……。お疲れではないですか？」

彼曰く、この辺は同じような作りになっており慣れない人は迷いやすいらしい。

「……はい、いえ、少しだけ。」

素直に”疲れた”と言うのが憚られ微妙にこまかす。

「もしよろしければ、コーヒーでもいかがですか？」

思わぬ申し出に驚いて彼を見返す。

「いえ、お急ぎでなければ。この間、私の好きなコーヒーが届きましてね、一人で楽しむには勿体無いぐらい良い香りがするんですよ。一緒にしていただけますか？」

正直、歩き疲れて”少し”どころでなく”大分”疲れていた僕は、喜んで彼のありがたい申し出を受けた。

「急ぎの用事はありません。というか、この後の予定はないんです。どんなコーヒーなんですか？」

「それはよかった。では早速、準備をしましょう。こちらへどうぞ。」

そう言って彼は、店の奥へと歩いて行った。

小さい店だと思っていたが案外広く、またよく見れば女性が喜びそうな宝石やアクセサリまでもが独特な規則性を持ってならべられ

ており、店のあらゆるところから彼のセンスの良さを窺わせる。

「足元に気を付けてくださいね、階段がありますので…。ここから一階に繋がっているんですよ。」

そう言って彼は僕を階下へ促した。

第六話（後書き）

久しぶりの更新。
新しい人の登場！

第七話

促されるまま階段を下ると、昔ながらの喫茶店にあるような本格的なカウンターの大きな暖炉といった凡そ最近ではなかなかお目にかかれないものが視界に飛び込んできた。そこはまるで物語のようで、先ほどの空間に感じた安心感とはまた違った心を落ち着かせるものを感じさせた。

「あの暖炉は使えるんですか？」

本物の暖炉など見たこともない僕は、興味津々で彼へ問う。

「もちろん。今は暖かいですから使いませんが、冬には薪を入れてマシユマロなんか焼いたりすると美味しいですよ。」

甘いものなど食べなさそうな彼からマシユマロなんて可愛らしいお菓子の名前が発せられ、寒い冬に煌煌と照らされる炎、その中へ串に刺したマシユマロを焙つて……。などと何とも魅惑的な想像を僕は掻き立てられる。

「……おいしそうですね。」

「冬になったら試してみるといいですよ。ただし、食べすぎには注意ですがね。」

そう言つて彼は悪戯小僧のような笑みを浮かべた。

不意打ちの意外な笑顔に、さつき会ったばかりの彼の”紳士”という印象を、僕は早くも”居心地のいい人”に塗り替えていた。

「さて、コーヒーにはミルク？砂糖？」

「両方お願いします。」

暖炉の話をしながら視界に入る色々なものに僕が意識を奪われているうちに、彼は手際よくコーヒーの準備を終わらせていた。

せっかくだからとカウンターの椅子に僕を座らせ、彼はコーヒーとお菓子を差し出す。

これは？と問えば、ヌガー・グラッセです。と聞いたような聞かな

いような横文字を覚えてくれた。第一印象の”紳士”は強ち間違っているのではないようだ。

お洒落なお菓子の味をもやもやと想像していると、いつの間にか力ウンターの反対側にいた彼は僕の隣に座っていた。

「自己紹介が遅れました。私、ここで店主をしています、神原尚人です。」

「僕は、今大学生で、戸塚慶吾といいます。」

自分も名乗っていなかったことに気づき、慌てて自己紹介をする。

「大学生ですか、どうりでお若いと思いました。」

「高校生じゃないですよ、童顔なんでよく間違われるんですけど二十歳越えてるんです。」

おそらく”若い”という言葉に”未成年”という意味を感じ取った僕は、成人であると念を押す。

分かっているんだかなんだか曖昧に頷きながら、ゆらゆらと彼は話す。

「若いつて、いいですよね。私みたいに年を取ってしまうと新鮮な感覚が鈍ってしまう。非常に残念です。」

「そういうものですか？」

「そういうものです。」

そう真面目くさって言う彼は、何とも形容しがたい不思議な空気に身に纏っている。

「戸塚君、冷めないうちに、どうぞ。」

彼の雰囲気は、僕に、せつかく淹れてもらったコーヒーの存在をすっかり忘れさせてしまっていた。

そして店だけでなく、店主である”神原尚人”という人物に、僕は走り出してしまった興味を抑えられなくなっていた。

第七話（後書き）

店主の名前が判明！
ちよつと停滞気味。

第八話

彼は一体、何歳なのだろうか。

知識の豊富さを感じさせる会話の内容や滑らかな身のこなしから、かなり世慣れた印象をつけるため、お年寄りとはいかないまでも結構な年齢なんじゃないかと思う。

だが、なかなかどうして、この僕の推測を見事に裏切る見た目…。第一印象どおり紳士であることに変わりはないのだけれど、中身と外見のギャップがありすぎるんじゃないかと思う。

ここまでくれば、いつそ外見はキグルミで中身は相応の他人であつた方が納得できる。

若いんだか歳を取っているんだか。まったく不思議な人だ。

これは僕の偏見だけれども、住宅街に、そこだけぼつかりと浮いて現れた異空間のような店の店主というならば”初老”の紳士のほうが、しっくりする。

まあ、若しくは”魔法使い”とか。

だが目の前の神原さんは、どう見たって20代後半から30代なのだ。ただ一応、僕の目測が誤っていないければというのを付け加えた。

会話は弾むものの、出会って間もない僕たち。突然年齢なんて聞いたら失礼だろうか。いや、女性ならば間違いなく失礼だ。

僕の悪い癖。

ちょっとした気になると、他人からしたら本当どうでもいい事でもずるずると考えてしまう。これで何度飽きられたことか…。

”三つ子の魂百まで”なんて昔の人は上手いことを言ったものだ。生来からの僕のこういったものはどうしようもなく、また、今となつては前向きに”個性”と捉えるようにしている。うん。年齢については、追々聞いてみよう。

思考のループに囚われてしまえば、自分とはかく、他人からは電池の切れたロボットに過ぎない。明らかに異常だ。世間とは欺瞞に満ち、マイノリティーに厳しい。

そして僕は、残念なことにマイノリティーであり、臆病者だから必至でそれを隠している。

「神原さん、今更ですけど、この店って家具屋ってわけじゃないですよね？」

さつきから散々会話をしておいて本当、今更。

「そうですね、家具も置いてはいますが家具屋ではないです。うまい名前が思いつきませんが、言うなればセレクトショップというのが当て嵌まるかもしれません。」

整った若い顔に不釣り合いな皺を作りながら彼は答える。

簡単な質問にですら真面目に考えて答えてくれる姿に、彼の真面目さを感じる。

沢山の人間が蠢く中で誰かと誰かが出会うというのは、運命というものの力が働いているんじゃないかと考えてしまう時がある。

そしてそれは出会う人物がよい人であればあるほど、そうであると僕は思う。

悪いところを見付けるのは簡単で、良いところは見付けにくい。

否定することは簡単で、肯定することは難しい。

素晴らしい人とは長く付き合いたい。

神原さんとは長く付き合っていきたい。恋愛感情じゃない人目惚れなんて、今日まで知らなかった。

新しい発見をした。

第八話（後書き）

彼女の出番を奪われた気が…。
さて、次回。

第九話

「アルバイト、してみませんか？」

店に通い続け数か月がたった頃、入口を入るなり神原さんは僕に言った。

降って湧いたような提案に僕はぼかんとしてしまう。

「もしかして、何か大量注文とかがきたんですか？」

この店でアルバイトだなんて全く考えていなかった僕はなんとも失礼な質問をしてしまった。

「あ、いや、お手伝いならアルバイトとかじゃなくってもしますよって意味で……」

取り繕う自分に、もつとうまいことは言えないのかとガツカリしながら早口でまくしたてる。

そんなあたふたした僕を、神原さんは怒るわけでも不機嫌になるわけでもなく面白そうに観察していた。

「大量注文はないのですが、戸塚君に、ちょっと配達をして欲しいんです。」

そう言って神原さんは手招きをする。

「配達って、やっぱりおつかいじゃないですか。」

「おつかいじゃなくて、アルバイトですよ。」

どうやら神原さんは、僕に継続的に何か頼みごとがあるらしい。

別に金銭的な契約を結ばなくとも、神原さんの頼みだったら手伝うのは吝かでないというのに。

しかし配達とは一体どんなものを持っていくのかと思ひながら呼ばれた所へ行くと、そこには綺麗な装飾が施された木箱があった。

普段見慣れないそれに、僕はただただ見惚れていた。

「このオルゴールを依頼主に届けて欲しいのです。」

そう言って神原さんは僕に住所と名前の書かれたメモを手渡す。

相変わらず男の人だというのに綺麗な文字を書くなあ。なんて感心する僕をみて、なんとも面白いものを楽しむような顔をした神原さんの姿は僕の気のせいであって欲しいと願う。

「代金とかを貰ってくるんですか？」

一応、お店の配達なのだから領収書とかも必要かもしれないが、生憎僕はそんなもの作ったことがない。

「いえ、代金は既に頂いてますから届けてもらうだけです。そんなに心配しなくても大丈夫ですよ。取って食われたりなんかされませんから。」

ふふふ。という擬音がぴつたりの顔をしてそう言う神原さんに、人の考えが読めるのでは？と過ったのはどうか伝わらないでほしい。

「では今から包んできますから、ちょっと待っててもらえますか？」

「あ、はい。じゃ、下に行ってます。」

そういえば、あんな高価そうなオルゴールなんて見たことがない。神原さんを待っている間、僕は今更ながらここが別世界であることを再認識していた。

果たして、あのオルゴールはいくら位なのだろう？どう見たって……いやいやいや。僕の心配はマイナス思考に繋がりがやすい。

値段については気にしないでおう。何より、僕のためだ。

「戸塚君。」

上から神原さんに呼ばれる。どうやら準備ができたらしい。

今更ながら、配達業者のほうがいいのでは？と言った僕の疑問に、ああいった業者は信用できないんですよ。と、神原さんはあっさり言っただけだ。

業者からしてみれば専門としてその手の事を仕事にしているというのに酷い言われようである。

それより、プロを信用していないというのに僕でいいのだろうか？

僕の心配を感じ取ったのか、戸塚君だからお願いするんですよ。と笑顔で言われれば、僕だって信頼されているんだと喜びこそすれ悪い気はしない。

「では、よろしくお願いします。」

アルバイト料は帰ってきてから渡しますね。と言われながら僕は送り出された。

「行ってきます。」

さて、このオルゴールを欲しがる人とは一体どんな人なのだろう。僕の気持ちは、まだ見ぬ新しい持ち主への興味へと移り変わっていた。

第九話（後書き）

久々の更新。
にも関わらず、進まない話。

第十話

電車で20分弱。駅からバスで10分ぐらい。

ここ、どこでしょう…ね。

言っておくが、道に迷ったわけじゃない。
来たことがない場所を歩いているだけだ！

神原さんから渡された住所と地図。流石というべきか、勿論見やすいわけ。

あの人にできないこととかはないんだろうな等と勝手なことを思ったりしているうちに、どうやら目的地に着いたようだ。

いやいやいや。

大きい家が多いなあ。なんて思っではいたけれども。
これは、大きすぎるんじゃないでしょうかねー。

ちよつとした芸能人なんか住んでいそうな邸宅。

…一応表札を確認する。

” 榊 ”

多分、間違いないだろう。

最悪間違ったとしても素直に謝ればいい。何事もプラスに考えるに越したことはない、と思う。

些か緊張しながらインターホンを押す。すると存外早くに返事があった。

「どちら様ですか？」

…若い女性？

家の外観から、てつきりお手伝いさんが出てくるのかと想像していた僕は、予想外の声に驚いてしまった。

「あ、あの…ヴィラヴェス力ですが、ご注文の品をお届けにあがりました。」

「はい、中へどうぞ。」

失敗した。

…これじゃ蕎麦屋の出前じゃないか。

こういう時に己の経験値の少なさを思い知らされる。

『ごめん、神原さん。オシャレって、難しいね…』

なんて心の中で謝罪とも諦めとも思える呟きをしながら『オートロツクかよ！』なんて器用に突っ込みを入れたりする。

案外僕はやればできる子なのかもしれない。

まあ、敷地に入れば想定内すぎて乾いた笑いが込み上げてくる。勿論笑うのは失礼なので我慢しているのだけれど…。

そして玄関で出迎えてくれた女性もとい少女は、とび抜けて美人だった。

神原さんも綺麗な顔立ちをしているが、目の前の少女はその比ではない。男性と女性を比べるもんじゃないというそもそも論なんて今更言わないで欲しい。そんなの分かりきってる。

美人の周りには美人が集まるというが、強ちそれも都市伝説ではなかったようだ。なんて、どうでもいい事を考えてしまう始末。

彼女がいる身とはいえ僕も男だったのかと認識させられ、ある意味安心した。

まあ言っちゃなんだが見た目は良いに越したことはない。それより仕事をしなくては…。

第十一話

「すみません、こちらに印鑑かサインをお願いします。」

そう言つて僕は少女に受領書を差し出した。

だが僕の声が聞こえていなかったのだろうか、少女はただ黙つてそこに立っていた。

「すみません？」

訝しみながらも僕が再度声をかけると、何かに気を取られていたかのように少女は固まった体を震わせた。

「あ。印鑑……。ちよつと待つてください。」

慌てたようにやつとそれだけの単語を答えた少女を僕は見送った。

まるで小動物を観察している気分で、パタパタという少女の足音さえそれらしい。

そして少女は暫く戻る気配がなく、いい加減立ち尽くしているのも疲れてきた僕は玄関の上り口に腰を下ろしていた。

しかし豪華な家である。

どこにもお金持ちという人種は存在するもんなんだと変に納得し、
”資本主義日本”だなんて事を考えていると漸く少女が戻ってきたが、どうやら探し物は見つからなかったようで、華奢な白い手にはペンを持っていた。

「ごめんなさい、お待たせして。あの、サインでも？」

美人は何をしても様になるもので、申し訳なさそうな顔をした少女に僕は暫し見惚れた。

「……ん、大丈夫です。では、ここをお願いします。」
やつとこれで帰れるな。

「ありがとうございます。失礼し……」

「あの、戸塚さんですよね。」

僕はこの少女にいつ名乗っただろうか？

いや、確実に名前なんて言っていない。では、どうして…？

そして少女は何を思っているのか、疑問符を最大限に浮かべているであろう僕の顔を見ても些かも気にすることなく話を続けた。

「覚えてませんか？…あれから少したってしまったけど、私、まだ、あの時と気持ちは変わってませんから。」

「…あの時って…。」

知らない美少女からの唐突な話に付いていけない。

どうなってるんだ？

僕は神原さんに頼まれてオルゴールを届けて…。

頭が痛い。

取り敢えず、帰りたい。

「すみません、人違いかと思えます。失礼します。」

”帰りたい” もうその時の僕には、その気持ちしか感じる事ができなかった。

だから呼び止める少女の声が耳に入ることなく、姿を振り返ることもしなかった。

第十二話（前書き）

R15っぽいかもしれないです。
まんまではないですが、思考的な方向で。

第十二話

忘れていた、いや、忘れようと閉じ込めていたものが粘着質な音を伴って溢れてきていた。

これを説明するには、僕の恥ずべき過去を話さなければならぬだろう。

結論から言ってしまうえば、あの頃の僕は愚かで周りを顧みることができていなかったのだ。

それは大学に通い始めて独り暮らしにも新しい環境にも慣れてきた頃だった。

僕は、ああ…俺は、遊び呆けていた。

あの頃の年代の少年達ならば誰しもが陥るんじゃないのかと思う。苦しかった大学受験を終え、大学入試に成功し、そして新しい生活が始まる。それは恰も新たな自由を手に入れたかのように感じられる。

その時に俺は選ぶべき道を誤ってしまった。今となつては、それが彼女に繋がっているのだから誤りだとは言い切れないが俺はその道に進むべきでなかったと思う。

たとえ僅かであろうとも積み重ねられてきた時間は、今の僕を形成している材料となっている。

俺が俺である理由。

そして俺が僕である理由。

全ては数珠のように繋がり返っている。

では、過去の愚かしい自分を正すことはできないのだろうか。

もし正すことができるのなら、僕は彼女と過ごす価値のあるモノ

になれるのだろう。

僕が勝手に信じているだけかもしれないが、もしできるのであればそうありたい。

今はまだ自分が自惚れているとしか言いようがない状態ではあるが、彼女にも好かれていると感じて過ごしている。

だが、これでは満足できない。

貪欲だろうがなんであろうが今の僕にとって彼女を手放すことなどではしないのだ。

さっきの少女はきつかけに過ぎない。

僕が俺であった頃を甦らせる物体。

確かに覚えているわけじゃない。それは俺の行いのせいでもあるのだが、覚えていたくなかったからかもしれない。

俺は、多分あの少女とも関係があったのだと思う。

自分で言うのもなんだが、俺は外見だけでいえば一般に望まれそうなものは大概持っている。所謂、容姿には恵まれている。重ねて頭のほうも悪くない。

ただ、それが災いしてか来る者拒まず去る者追わずになっていた。

あの頃の俺を弁解するならば、青少年男子なら誰しもある生理的現象が一般的でなく、かつ要求に応えられる相手に困らなかったからこれが揃えば俺じゃなくても同じ状態になるはずだ。

サークルでの飲みなどでこれに拍車がかかったのは言うまでもないが、悪友とツルんで毎夜遊んでいたのもよくなかった。一番の原因は俺自身が求めていたからかもしれないが…。

荒んだ時間を過ごしていたとも言える俺の行いは男からも女からも眉を顰めるものであっただろう。表立って咎められなかったのは、幸運というべきか不幸というべきか俺には分らない。

そして、こんな生活を続けていれば必ず起こるであろう女性関係のトラブルは持ち前の頭と器用さで大概のものならば回避できていたため、キャンパスでド修羅場なんて事態は今も起こってはいない。

勿論、こんな俺であつたことは彼女には言えるはずもなく、今は彼女の彼氏として僕として真面目に生きていきたいと思っている。

だから、こんなことで後ろ暗いアレを引き出されたくはないと自分勝手に頭を悩ませていたりする。

もう終わったこととして閉じ込めていたが、不可抗力といえども溢れ出てきてしまったからには、俺として、あの少女とはきちんと終わりにしなければならぬだろう。

第十二話（後書き）

戸塚くんは、女性の敵！みたいになってしまっておりす。

第十三話

過去の俺が起こした罪過を、今の僕が、果たして償いきれるのだろうか。

存外にも僕は神原さんと少女との組み合わせというミスマッチさに焦っていたらしく、配達を終えたというのに未だ店に戻れずにいた。言い訳をさせてもらえるのならば、混乱しているのだ。

どんな顔をして神原さんに会えば？

神原さんは僕の過去にしていたことを知っているのか？

知っているのならば、今後どうやって接していけばいいのか？

いや、むしろ関係を保つこと自体可能なのだろうか？

神原さんと少女の繋がりは？

神原さんの配達の依頼は些か不自然なところを感じなかったか？

神原さんを疑うわけではない。

でも、湧きあがる疑問は絡み合う蔭となり僕を捕らえて離さない。

「あ、坂本？今からいつものトコ向かうから、そこ来て待ってて。」

考えのまとまらない僕は、悪友の坂本に都合も確かめもせず電話で用件だけ伝える。

「は？いきなりなんだよ。ケイ、俺にも都合つてもんが…。」

「とにかく来て。じゃ。」

困惑気味の悪友の反論に耳を貸している余裕など僕にはなく、押し付けるように電話を切った。

あいつには聞かなきゃならないことがある。

色々と考え込むくせに自己分析が不得手な自分に溜息をつく。今まで好きなことばかりしてきた罰が当たったのだろうか…。

紗依を失うわけにはいかないこの今になって、自分のせいで彼女に僕に対する不審なんて欠片も与えたくはないのに。

こんなにも思い入れる相手ができるなんて思っていなかった。むしろ俺は諦めていたのかもしれない。

荒んでいた俺は、見えるものすら見えていなかった。

今やっと手に入れた大切なものを、僕はどうしても守らなくてはいけない。

第十三話（後書き）

新しい人、出ました。

第十四話

目的の場所に着けば、そこには人目を引く金髪が気怠そうに座っていた。

「坂本、明るいうちから酒を飲むのはどうかと思うよ。」

一応、日本国では昼から飲酒というのはスタンダードじゃないんだよと含ませた言葉を金髪男に伝え、さも当然とばかりに僕は金髪男の目の前の椅子へ腰掛ける。

「誰のせいで俺が飲んでるんだと思ってるんだよ、ケイ。」

派手な顔をこれでもかというほど歪ませ、金髪男もとい坂本は僕に非難めいた視線を向ける。

原因は考えずとも僕だろうが、坂本のくせに口答えするなんて生意気。と俺様なことを思ったが、坂本相手ならば仕方ないことだろう。

「そんなことより、僕に言わなきゃいけない事があるんじゃないの？」

満面の笑みを湛えて嫌とは言わせない強い口調で質問という名の確認をする。

「それが聞きたくて俺を呼んだのか？」

眉間の皺はそのままに真っ直ぐに僕を射抜くその視線は男の僕でさえときめきそうになる。

しかし僕にはそんな趣味はないし、長い付き合いで現実に戻るのには常人に比べれば早いものだ。

「僕が隠し事されるの嫌いだって、知ってるでしょ。」

本当は態々聞かなくなつて分かつている。

それでもそれは嘘なんだと、関係ないのだと思っていた僕がそこにいる。

意地が悪いだなんて言われたくはないけれど、今の僕は形振りなど

かまっていられる状態ではなくなってきた。

坂本の質問を無視して自身の質問に答えると静かに強迫し、かつ裏は読めているのだと滲ませる。

「ケイ、分かっているんなら俺に聞くな。俺には言えないって知ってるだろ。」

大きな溜息と共に苦しげに言う坂本の姿は、長年付き合ってきた悪友の初めて見るものだった。

いつも僕の事を一番に考え、僕の我が儘にも滅多に異を唱えることなどなく僕といつも一緒にいた坂本。

紗依の他に心を許した唯一の人間。

自分を落着かせるように猶もアルコールを摂取し続ける坂本を僕はただ見つめていた。

坂本にも事情があるのは分かっている。

だけど、僕にだって譲れないものがある。

次の行動を纏めることができず気晴らしにとアイスティーを注文する。

カフェインは逆に興奮作用をもたらすのだっけ等と意識を飛ばしていれば、未だ僕から視線を剥がさない鮮麗な面と絡み合う。

坂本は僕の言うことをきくけれど、僕も坂本の言うことには逆らえない。

それは身分とか契約とかではなく心的なものに要因するのだけれども、視線で坂本の考えを読めた僕は溜息と一緒に口約束をする。

「分かった、無茶はしないから。でもこれだけは答えて。いや、僕の言うことに頷くだけでいい。」

無理強いはできない、いや、したくない。ただ、これだけは答えてもらはなくては…。

「この件で動いているのは、父さんだね。」

僕の言葉に坂本は無言で頷いた。

その眼には自分の今後を憂うのではなく、僕を気遣う色が乗せられていた。

第十五話

細やかな否定を含んだ疑問が確信へと変化する。

無作法だがテーブルを爪で弾き苛立ちが爆発するのを抑え込む。

勿論そんなことで収まるようなものではないが、外に出すことなく内に溜め込むよりは幾分かマシである。

珍しく苛立ちを隠さない僕に坂本が悲愴な顔をする。

「ケイ…。」

僕の名に続く言葉を態とらしく音を立てて立ち上がり遮る。

反射的に体を震わせる坂本の姿に、板挟みになってしまった結果を招いた僕は素直に謝ることすらできない。

「帰る。」

そう一言だけ呟いて立ち去る僕を坂本は責めない。

優しさか、または無言の圧迫か。

考えずとも答えは出ている。

坂本は優しすぎるのだ。

そんなことでは何れ身を滅ぼしてしまうだろう。

尤も、滅ぼすのは僕であろうが…。

向かう先は決まっただけでも足取りは重く見えない壁が僕を押し潰すようだ。

これから相手にしなければならぬ人を思い憂鬱になる。

一旦繋がりが消えたといえども自分の父親だ。

彼は一筋縄ではいかないことは百も承知だし、俺が起こしたことが発端となっている以上僕はこれから逃げられはしないだろう。

できたとしても僕は逃げてはいけなと思う。

起こした責任はきちんと自分で取らなくてはいけない。

アポイントを取ったところで彼は逃げもしないだろうが、少しでも上手に立ちたくて態と連絡は入れない。

今の時間ならば家にいる可能性の方が高い。

暫く踏み入れていなかった家へと僕は歩みを進める。

思い出す記憶の多くは決して良いものではないが、多少なりともある暖かなものが母親のもののみとは何とも皮肉である。

幼い僕は何も分かってなどいなかった。

悲しむ母親の姿も。

僕を支えてくれた坂本のことも。

だけど今なら分かる。

頼ってばかりはいられない。

第十五話（後書き）

あー、どんどん泥沼的方向へ…。

第十六話

「おかえりなさいませ」

そう言つて出迎えてくれたのは、見覚えのある暖かい顔だった。

「いらつしゃいませ、じゃなくて？」

僕が皮肉つてそう返すと、辛そうに彼女は笑った。

「坊ちゃまは旦那様のお子様ですから、この家の方ですよ。」

「そう…。あの人の息子だったね、僕は…。」

未だ断ち切れない繋がりを僕はこれから先も感じながら生きてゆくのだらう。

親子である以前に、僕はあの男の血を受け継ぐモノなのだから。

「あの人はいるね。」

「はい、坊ちゃまのいらつしゃるのを楽しみにされております。」

「…菱木さんも元気そうでした。」

ぼそりと零した僕の言葉は彼女に伝わったか分からなかったけれど、何年も会っていなかった優しい彼女の元気な姿にじっとりとした緊張が和らいだのは事実だった。

相変わらずの人の生気を感じさせない邸宅。

寂しくも侘しくもある孤独な空間。

こんなところで暮らしては真面でいられるべくもないだろう。だからといって、あの人を理解しようとは思わないが。

慣れた足取りで彼の人の部屋へと向かう。

今にも帰ってしまいたい衝動に駆られるが、それを僕の良心が許さない。

何も持たない僕にできることなど数えるくらいしかないのだから。せめて俺の不始末は僕がつけなければ。

ノックの向こうから返るはずの返事を待たずにドアを開ける。

許可を待たなかったのは僕の微力な抵抗だと思つて欲しい。

ここまで来ておいて愚かにも僕は怖くてたまらないのだ。

この、僕の父親という生き物が。

「ノックというのは、相手の返答を待つてからこそ価値があるのだよ。」

昼過ぎだというのに薄暗い部屋の奥から、さして驚いた風もなくゆったりと言葉を紡ぐその姿は、僕の最後の記憶よりも年老いていた。

「お久しぶりです。お元気そうでなにより。」

お小言は無視して造りこんだ笑顔で社交辞令を述べる。

部屋にジリジリと漂う気配はあの人から放たれているものだろう。

歳を重ねても、まだ健在ということか…。

「社交辞令を言いに来たのではないだろう。」

ちらりとも僕をみることなくチクリと言い放つ。

どうせ見えているのだろっ。

「ええ。では、僕の言いたいことはご存知ですよね。」
全てを真に受けていたのでは僕が持たない。
相手にするには分が悪すぎるのだ。

「さてな。お前がどこまで掴んでいるのか知らんが、協力してやらんこともない。」

「だが…。でしょう？その続きくらい読めますよ。」
馬鹿にするなど言わんばかりのため息交じりに言った言葉は僕の虚栄に過ぎない。
こうでもない僕はその場に崩れてしまいそうで、今こうして立っているのが不思議でならない。

「さんざん馬鹿をやってきたらしいが、頭はまだマシだったようだな。」

どこまで知っているのか、この男は。
父親といえども何年も離れていた身で、別れた息子の近況に詳しいなんて…。

どれだけの部下が投入されたのだか。
彼らも命令といえども私的な仕事には辟易しているに違いない。

「お前が言う前に私から言っておこう。どこまで私の手が入っているかなどは聞かんほうがお前のためだ。」
下卑た笑いを連想させるその科白に嫌気がさす。

「貴方に逆らう気など、疾うの昔に捨てましたよ。それより、榊の御嬢さんは処理してくれるんでしょうね。」
彼女に感づかれる前に早く消してしまいたい。

「お前の不始末が招いた結果だ。それなりの代償がなけりやできんな。」

やはり親子といえども、この男には関係ないのだ。

僕を監視しておきながら、僕の人生を自分の駒として使う。

そして扱いやすいように捻じ曲げる。

「僕が借りを作る必要はないのでは？」

「お前次第だな。そんなものなくともと思わせる何かを持っているのか。」

痛いところを突いてくる。

この男の思い通りに動きたくはないと思いながらも、敷かれたレールに乗っているのが感じられる。

多分、気のせいではないだろう。

一体、なにが望みなのか…。

「ありませんね。貴方の望みは？」

僕に差し出せるのは、僕自身しかない。

「人に使われるよりは使う側にいたいと思うだろう？」

それがさも当たり前であるかのように言うこの男に嫌気がさす。

「なにを仰りたいのか。」

先は読めるが、あえて言ってもらおう。

「は。態とらしいな。…残念ながらお前の弟は使い物にならんのだな、お前に順番が回っただけの事。」

さも面白そうに言う姿は、現実でも自分の父親とは思いたくなかった。

「補欠に本番ですか。今更…。」

空笑が出るのを堪える。

「出番を与えてやっているんだ。感謝することだな。」

いくら僕が嫌と言ったところで、偉そうなこの男の言うことを聞かなければ今回の処理はできない。

結局、踊らされるのか…。

「僕は別に後釜なんて望んでいないんですけどね。彼については長い目で見てやったらどうですか？」

だが、素直に聞くほど僕は従順じゃない。

「お前に指図されるとはな。言うようになったものだ。」

「…どうも。」

「まあ、いいだろう。今回は手を貸してやる。あいつの成長よりお前のほうが面白そうだ。」

どうにか興味を引けたようで、これで借りはなしだろう。

「ところで、神原さんとはどういった関係なんですか。」

知らないと言って欲しいと願いながらも、どこかで手薬煉を引いている黒幕から真実を伝えて欲しいと思う自分が堪えきれずに口を開くのを僕は止めることができなかった。

第十六話（後書き）

久々の更新。

やっと展開…かな。

第十七話

薄暗い部屋にも慣れ、僅かだが動いた感情が表情として窺えたような気がする。

今まで動きを見せることなど殆どなかったが、久方ぶりに見るその変化は彼も一応人間なのだと感じる。

「尚人とは仲良くやっているようだな。」

自分で聞いておいてなんだが、やはりこの人と繋がる人であったのかと落胆する。

しかも、そんな親しげに名前を呼ぶほどの…。
いつそこは嘘でも無関係と言ってほしかった。

「…おかげさまで。」

細かいことは言ってやらない。
完全なる八つ当たりだが、当たるところは目の前の男しかないのだ。

「は…。お前もまだまだ子供だな。自分のお気に入りが他の物だったのがそんなに気に食わんか。」

見透かしたように、父親面をするこの男は何を言っているのか。

「勝手に独占欲が強いのかのように言われるのは気分が悪いですね。」

僕の返しが意外だったのか、一瞬、男は目を見開いた。
それが何故だか嬉しくて、胸がすいた。

「多少の我が儘くらいは聞いてやってもいいが、尚人も坂本も私の物だという事を忘れるなよ。勿論、お前も私のものだ。」

さながら蛇に睨まれた蛙の矜持である。

居竦む僕を気に留めるでもなく男は話し続ける。

「紗依といったか、あれは緋真に似ているな。お前が執着するのも分からんではない。」

遠い目をしながらそう言う男にはさっきまでの険呑な雰囲気はなく、どこか物寂しさすら漂わせていた。

見た目だけでなく、男は心も歳をとったのだろうか。

かつてない男の流れ出る感情は僕を混乱させるのに十分だった。

男の変化が老化によるものだとすれば、老いとはなんと平等で暴力的なのか。

「貴方と好みが一緒だということは分かりましたから、紗依のことは放っておいてください。彼女は僕のです。」

これだけは言っておかなくては。

今回、図らずともここに來た意味すら見失ってしまふ。

坂本にも辛い思いをさせたというのに…。

「夕食は菱木に用意させてある。食べていくといい。」

突然の話題転化に思考がついていけないが、男の話したいことが終わったということだろう。

どこまでも自分勝手な…。

「では、お言葉に甘えて。済んだら勝手に帰ります。」

緊張していたはずの僕は頭が追いつかなかったお陰なのか、若干投げ遣りともいえる返答をしていた。

それを男は咎めるでもなく面白そうに眺めているだけ。

一体読めないにもほどがある。

あたかも新しい遊びを見つけた少年のごとくニヤつくのは止めて欲しい。

いい歳をした男が、もとい親爺がニヤニヤしても気色が悪いだけでいい事なんてひとつもないのだから。

その上、悪いことに、ニヤついた男が手に入れた新しい玩具は間違いない僕だ。

迷惑極まりない。

これだから無駄に権力と金のある奴は性質が悪い。

暇なのか。

「慶吾。」

ああ、この人は全く…。

突き放したかと思えば寄ってきて、気まぐれに掻き回すのは性分なのか。

零すように名前なんて呼ばないでくれと言えたら、どんなにマシか。

態とだろつと乱される自分に腹が立つ。

男が言うように僕はまだ子供のままだ。

認めてしまえばなんてことはない。

子供な僕は男の言葉に応えてなどやらない。

聞こえないふりをして僕は男の部屋を後にした。

第十七話（後書き）

こりゃー、まだまだ続いてしまっな。

第十八話

鬱々とした気分は晴れず、寧ろ悪化しているといってもいいだろう。

榊の娘は、あの男に処理を任せた。父親としては信用ならないが仕事相手としては信用に足る男である。

また後がないとも限らないが、下手を打たない限り首の皮一枚ではあるが安心できる。

問題は彼女だ。

いつも知れぬ不安に包まれながら平穏な関係を貫き通すほど僕は強くないと俺は知っている。

皮肉なことに弱い僕は、それでも彼女から離れることができない。彼女の為を思うのであれば、この関係は早々に断ち切ったほうが賢明であろう。

だが、僕は身勝手にも彼女を手放す気など微塵もない。

なんて傲慢。

やはり、あの男の血が僕には悲しいかな流れているのだ。

居心地の悪い邸宅を後にすれば、見覚えのある男が視界に紛れ込んだ。

「待つてろって誰が言ったかな。」

わざとらしい明るい声で男に問う。

「…心配だったから。」

図体に似合わぬか細い声で答えた主は、どうしたって縮まらない体を叱られた仔犬のように項垂れている。

ああ、やっぱり君は僕に必要なだ。

「そ。で、いつまでそうしてるの？」

男を見ることなく歩く僕は、嬉しさともいえる感情が顔に出ないようにと努めて平然としていたが、それもできていたのか。

「ケイ、俺はケイから離れてはいかないから。」

うん。

「俺は、ずっとケイと一緒にいるから。」

うん、わかってる。

「だから、ケイ、俺から遠くに行かないで。」

いつの間にか僕の前にはいた男を通り過ぎ、僕の背中に男は言葉を紡ぐ。

今にも崩れそうな声に振り向けば、派手な頭はそのままに何とも情けない顔をした坂本がただ道に立っていた。

「坂本はさ、阿呆なの？」

感情を乗せない僕の問いに、坂本は俯いていた顔を漸く僕に向ける。

「…え…？」

「違う？」

につこりと余所行きの笑みを張り付けた僕を映す日本国では人外な瞳は、今にも何を言わんとしているのか分かり過ぎるくらいである。いい加減、思考と感情がダダ漏れというのは慎んだほうがいいんじゃないかと、これは僕の個人的考え。

「ま、いいよ。わかりきった事を僕に質問しないでよね。」

行かないの？と瞳に感情を乗せれば、僕の金縛りという呪縛から解放されるがごとく坂本はぎこちなく僕へと歩き出す。

まだ何か言いたそうである坂本をあえて無視し、僕はこれからどうしようかと考えを巡らせていた。

第十八話（後書き）

明るい話になるはずが。。。

第十九話

どこへ向かうとも決めずに動けば、神原さんの店の近くに来ていた。

行先も告げずに動き回る僕に大人しく付いて来た坂本については、もう何も言うまい。

無意識の内の意識というものが…。

ここまで来れば神原さんのもとへ行かないわけにはいかないだろう。今行かなければ、これから先はきつと行かない、いや、行けない。自分の性格が恨めしいが、ぐるぐると無限に嵌って悪い方向にしか進めない僕だから。

ここで坂本がいるのは逆によかったと思うところだろう。

一人で行くよりは、ずっと気まずくない。

坂本。と進行方向だけを見ながら口を開けば、どうしたの？と優しく返すこの男は人がいいんだか何だか…。

さんざん僕に振り回されていながら全く気にする素振りが無いのは好かれている証拠と思っておこう。

「今からちよつと行くとこあるから。」

「うん。じゃ、俺は帰ってようか？」

期待した応えとして正反対のことを言う坂本に、ここは空気を読めと眉間に皺を寄せる。

「いや、一緒に来て。」

「…大丈夫なの？」

一体何が？

と過るが、坂本に神原さんのことは話していないが榊の件と一緒に調べたのだと思い当たる。

まったく、鈍いんだか鋭いんだか…。

「問題ない。僕と一緒にって言うてるのに、不満なの？」

意地悪くも坂本の優しさに付け込む。

予想通りに、そんなことはないと言う言葉にいつの間にか強張っていた身体力が緩んでいく。

結局僕は一人では何もできない子供であるということか。

紗依だけでなく坂本にも依存する僕のココロは不安定でなんとちっぽけなのだろう。

あまつさえ、あの男にすら依存しているのかもしれないのだ。

これを滑稽と言わずなんとあらわすのか。

一人前の大人として扱って欲しい。

一人でできるんだと認めて欲しい。

独りは怖い。

僕を独りにしないで…。

矛盾した感情の渦は、際限なく湧き上がり僕を飲み込んでゆく。

無様にも震える自分の手を見て笑いが零れる。

一体いつまで子供でいるのだから。

大人になりきれない子供の僕は身近な助けに手を伸ばす。

第二十話

「…神原さん」

薄暗い人の気のない店内へ声をかける。

未だ配達の報告をしていない僕は、実際神原さんと会うことが気ま
ずいとさえ思っているわけで。

ついさっきまであの男と交わっていた僕など消えてしまったかのよ
うな情けない気持ちだが、きっと僕の顔だけでなく体からあふれ出し
ているに違いない。

そして今ここに立っているのは、最低限の常識として仕事は完遂し
なければならぬ。と僕の頭の天使が叫んでいるからに他ならない
そう。今の僕の頭を占めるのは、情けない話それが一番強いのでは
ないだろうか。

どれくらいの時が過ぎただろう。

時間としては何分ともなっていないのかもしれないが、僕には植物
が根を張るほどに思える時が過ぎた。

入口に立ち尽くす僕を茜色の光が憎らしく暖かく照らしてゆき、西
窓から色濃く伸びる茜色の筋は、暗がりには佇む神原さんを宛ら聖者
のごとく浮かび上がらせる。

「少し、遅かったかな。」

何も知らないとはかりに春風の微笑みを浮かべる彼にぞくりとする。

「すみません、私用で寄り道をしていました。」

「…そう。」

心配したよと言う彼は、きっと僕がさっきまでしていたことを知っているのだろう。

彼奴も狸だが、この人は狐のようだ。

このまま黙って関係が続けるのは簡単とは言わないが、僕にとっては傷が少ないのかもしれない。

でも僕は知ってしまったし、知りながら知らなかった時のように振る舞うなんて器用なことはいらないだろう。

表面上は変わらなく繕えても、これからいつもどこかで考えてしまふに違いない。

この人は、彼奴のものであると。

そして、僕も彼奴に囚われているのだと。

「冷えたでしょう。そんなところに立っていないで、下にどうぞ。

そちらの彼も、ね。」

これからの展開など読めるはずもないが、優しい神原さんは幻想であつたのかもしれないと思わせる彼の拒否を赦さない言葉に寒さが増した気がした。

第二十話（後書き）

新年になってしまいました。

亀なこちらにお越しいただいた貴方様。

ありがとうございます。

年を越ししても変わらずお付き合いいただきたく存じます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7414p/>

確かめたいこと

2012年1月8日08時52分発行